

聖書：使徒 27：1～26

説教題：私は神によって信じている

日時：2014年10月12日

いよいよパウロはローマに向かって出発します。責任を持って連れて行くのはユリアスという親衛隊の百人隊長。1、2節の「私たちは」という表現から、著者ルカもこの旅に同行したことが分かります。また2節にマケドニヤ人アリストアルコ（19：29、20：4）も同行したとあります。この箇所を3つの点から見たいと思います。

まず旅程についてです。著者ルカが同行していたせいか、様子が詳しく記されています。まず乗り込んだのはアジアの沿岸各地に寄港して行くアドラミテオ行きの船。百人隊長ユリアスは途中でローマ行きの船に乗り変える計画で、まずはこの船に乗ったのでしょう。翌日シドンに到着します。ユリアスはパウロを親切に取り扱い、パウロは友人たちのところへ行ってもてなしを受けることができました。そこから再び出帆します。しかしこの後の旅は段々と暗雲立ち込めるものとなります。4節に「そこから出帆したが、向かい風なので、キプロスの島陰を航行した」とあります。予定のルートを進めず、遠回りしなければならなかった。そうして何とかルキヤのミラに入港します。ここで百人隊長は船を乗り換えます。ちょうどイタリアへ行くアレキサンドリヤの船があったのです。この時点では年内にローマに着くことを計画していたのでしょう。しかし出帆後、またしても船の進みは遅くなります。ようやくのことでクニドの沖まで来ましたが、風のためにそれ以上進めなくなります。そこでクレテの島陰を航行します。すなわちクレテ島の南側ルートを取らざるを得なかった。そして岸に沿って進んで、ようやくのことで「良い港」と呼ばれる所に着きます。

9節に、かなりの日数が経過しており、断食の季節もすでに過ぎていたとあります（欄外9参照）。地中海における船旅は9月14日以降は危険となり、11月11日以降は不可能となるようです。ですからこれ以上進むのは危ない！とパウロは注意します。ところが航海士や船長たちは、できればもう少し先のピニクスまで行って冬を越した方が良いと述べます。しかしピニクスに行くためには、島の南側に出っ張っているマトラ岬を回り、メッサラ湾を通過して行かなくてはなりません。短い区間とは言え、そこは船にとって無防備となる場所です。人々は穏やかな南風が吹いて来た時、この時とばかりに錨を上げ、航行を開始します。南から風がゆるやかに吹いて来る限り、沿岸から着かず離れずの距離を保って進むことができます。ところがメッサラ湾を渡ろうとする時、突然ユーラクロンという北東からの風、すなわち山から吹き下ろす暴風が吹きつけて来ます。そのため船は陸から引き離され、外海へと流されてしまいます。沖にあるクラウドという小さな島陰に入ったので、何とか小舟を処置することができたものの、18節では積み荷

を捨て始めます。さらに三日目には船具まで投げ捨てた。20 節には「太陽も星も見えない日が幾日も続き」とあります。今どこにいるかも分からない。なお激しい暴風が吹きまくる。そのため、「私たちが助かる最後の望みも今や断たれようとしていた」と記されるほどの状態に至ったのです。

これと似た箇所として他に思い浮かぶのはどこでしょうか。それはヨナ書でしょう。ヨナが乗ったタルシシュ行き船にも激しい風が吹きつけ、船は難破しそうになり、人々は積み荷を海に投げ捨てました。しかしあれとこれとでは大きな違いがあります。ヨナの場合、彼が主に聞き従わなかったために、あのことが起こりました。しかしパウロの場合、彼が何か悪を行なったわけではありません。彼は主に従っています。彼は大事な主の器です。にもかかわらずこのようなことが起こった。私たちはここから、特別な罪を犯していなくても、このようなことは私たちの生活に起こり得るということを改めて覚えさせられます。私たちは文字通りの嵐を海で経験することはないかもしれませんが、人生の中で嵐を経験します。しかもこの箇所と同じく突然に。穏やかな南風が吹いて気持ち良く航行していると思ったら、突然ユーラクロンが吹きつけて来て翻弄される。たとえばそれまで全く健康だと思っていたのに、ある日突然病気であることを発見する。あるいは思わぬ事故に巻き込まれる。思わぬ事態の中に投げ入れられる。そういう中にある私たちにこの記事は光を与えてくれるのではないのでしょうか。私たちの生活にもこういうことは起こり得るのです。

第二に見て行きたいのは、より大きな視点で見た場合のこの箇所の位置ということです。今、この書はパウロのローマ行きに焦点が当てて書かれています。パウロ自身、ローマに行くことを多年希望していました。その先のイスパニヤにまで伝道するためです。しかしパウロはまずエルサレムに来て、ユダヤ人の教会と異邦人の教会の一致を確かなものとするに心砕きました。ところがそこでの迫害は激しく、パウロはエルサレムでの殉教を覚悟するほどでした。そんな中、主がパウロに現れて約束してくださいました。23 章 11 節：「その夜、主がパウロのそばに立って、『勇気を出しなさい。あなたは、エルサレムでわたしのことをあかししたように、ローマでもあかしをしなければならない』と言われた。」パウロにとってこの言葉はどんなに大きな励みだったでしょう。私たちもこの約束を心に覚えながら、以後の箇所を読んで来ました。そしてこの箇所も読んでいます。そういう私たちが問わずにいられない問いは、果たしてこの海の難に遭遇して、主の約束はどうなるのかということでしょう。それは果たされるのか、それとも頓挫してしまうのか。結論的に私たちが見るのは、パウロはこの中で守られ、やがてローマに着くということです。ですからこの記事を通して私たちが改めて学ぶことは、神はご自身が計画したことを成し遂げるまでは、どんなことがあってもその人を守られるということです。どんなに激しい嵐や暴風が吹きつけても。それを翻って私たちに適

用すれば、こうなります。神は私の人生に対して持っている計画をみな成し遂げるまでは私の人生を終わりとはされない。どんなに激しい嵐が襲っても、その計画が成し遂げられるまでは必ず私を守ってくださるということです。

この記事を読んで思い起こすのは、私も一度、いつ船がひっくり返って死んでもおかしくない状況を経験したことです。それはアジア宣教ツアーでフィリピンに行った時のことで、田舎の牧師を訪ねた後、その牧師が所有していたあまり使っていない船に乗って火山島を往復した時のことでした。小さな船の両側に竹を渡してロープで縛り、バランスを保っているだけの、見るからに「これ大丈夫？」と思われる小船で、行きは大丈夫だったものの、帰りには天候が変わり、真っ黒な雲で空が覆われる中、激しく打ち寄せる波でいつ船はひっくり返り、分解してもおかしくありませんでした。もちろん全身ずぶぬれです。救命胴衣などはありません。私はこれでは数日後に日本のテレビや新聞で、「日本長老教会の旅行者がフィリピンの田舎で十数名死亡」というニュースが流れることになるのかな〜と本当に思いました。摂理信仰が試されました。また私は飛行機に乗って恐い思いをしたこともあり、以来あまり飛行機は好きではありません。しかしある時、マタイ 6 章 25 節の御言葉を説教する準備をしていて教えられました。「だから、わたしはあなたがたに言います。自分のいのちのことで、何を食べようか、何を飲もうかと心配したり、また、からだのことで、何を着ようかと心配したりしてはいけません。いのちは食べ物よりたいせつなもの、からだは着物よりたいせつなものではありませんか。」すなわち私たちにいのちを与え、からだを与えてくださった神は、それを保つに必要なものは言うまでもなく備えてくださる。これはさらに言えば、神が私に定めたご計画をみな実現するまでは、神は突然私の地上の人生を終わりにされることはないということでもあります。その計画がみな達成されて初めて、神は私をご自身のみもとへと召される。このことを知って以来、随分考え方が大きく変わりました。

同じように神はこの嵐がどのようなものであるにせよ、パウロを守っておられたのです。あなたはローマでもあかしをしなければならぬ、という御心を必ず実現される。ですから 23 節以降で、御使いを通して、あなたは必ずカイザルの前に立つと改めてパウロに確認してくださいました。神は一人一人に定めたご計画をみな果たすまで、その人を導かれます。どんな荒波や嵐が襲いかかっても、神より強いということはありません。それらを越えて事を導かれる神がおられるということが、この記事を通して私たちの前に示されています。

三つ目に注目したいのは、この嵐のただ中におけるパウロの姿についてです。パウロの言葉は 2 つ記されています。一つ目は 10 節です。「皆さん。この航海では、きっと、積み荷や船体だけではなく、私たちの生命にも、危害と大きな損失が及ぶ、と私は考えます。」パウロはここで、これ以上進まないようにと警告しました。パウロは何度も船旅

をし、難船も経験した人だったので、このように判断できたのでしょうか。注目すべきは、彼はここで「止まるべきだ」と言っていることです。神によるなら不可能はないと言って無茶なことはしていない。常に冒険的なことをすることが信仰的なのではない。とかく前に進むことだけが信仰的な態度と勘違いしやすい私たちにとって、これは大切なことを教えてくれる一コマです。

しかし何と言っても私たちにとってチャレンジとなるのは、二つ目のパウロの発言でしょう。今日の箇所後半で浮き彫りにされていることは何でしょうか。それは人々がみな助かる望みを失っている状況で、「元気を出しなさい」と言っているパウロの姿です。みな希望を失っている中で、彼だけが希望を抱いて行動しています。なぜこのように振る舞うことができたのでしょうか。それは彼が「信仰によって」歩んでいたからでしょう。そしてその信仰は「御言葉に基づく」信仰でした。パウロが抛り所としたみことばは、前の晩、神の御使いが告げた言葉でした。24 節：「恐れてはいけません。パウロ。あなたは必ずカイザルの前に立ちます。そして、神はあなたと同船している人々をみな、あなたにお与えになったのです。」ある人はこれを読んで思うかもしれません。「私だって、神から直接このように語りかけられたら、嵐の中でもパウロのように振る舞えるだろう。しかしこのような直接啓示は今日、私たちに与えられない。」と。確かに時代的な違いはあります。この時代はまだ聖書が完結していない時代です。ですからこのような直接的な啓示がありました。その一方、今日はこういう啓示はありません。なぜなら聖書が完結したからです。すなわち私たちが信仰によって歩むために必要なことはすでに十分ここに書き記されたからです。確かに私たちは自分が乗った船が遭難しそうな時、そこで自分が助かるのか助からないのか、前もって知ることはできません。しかしそこで信仰によって歩むために必要なことは、聖書にすでにたくさん記されています。たとえば、主がともにおられるということは確かです。マタイ 28 章 20 節：「見よ、わたしは世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。」またそのお方は主権者です。マタイ 28 章 18 節：「わたしには今や天においても、地においても、いっさいの権威が与えられています。」また先にマタイ 6 章 25 節を引用しましたように、神は私たち一人一人の人生に対する計画を持ち、必ずそれを全うされるお方です。またイエス様の十字架の贖いのゆえに、信じる私に臨む苦難は呪いではないと信じることができます。むしろすべてを相働かせて益としてくださるというローマ 8 章 28 節の御言葉を私たちは頂いています。私たちはこれらの御言葉に基づいて、嵐のただ中でも信仰によって歩むことが可能になるのです。人々が色を失う中で、結果は主にお任せしつつ、非常な平安と望みを抱きつつ、なすべきことに向かうことが可能になるのです。

嵐の日にこのような信仰に生きることができるようになるためには、普段からの生活も大切になるでしょう。パウロは 23 節で「昨夜、私の主で、私の仕えている神の御使いが、云々」

と言いました。パウロは普段から神を主として従い、神と交わって仕える生活をして来ました。その神が嵐の中でも改めてみことばを語って下さり、パウロもその約束に生きることができた。同じように私たちが日々御言葉に聞き、神に信頼し、従う生活を送る中で、いざという時に御言葉をより深く確信させられる。今まで何度も聞いて来た御言葉に改めて力づけられる。そして普通なら望み得ない状況の中で望みを抱いて生きるという生き方ができるように導かれるのです。

私たちが同じような嵐の中に投げ込まれるかもしれません。今そのただ中にある方もあるかもしれません。助かる最後の望みも今や断たれたという状況があるかもしれません。しかし私たちはそこで信仰によって生きることができます。御言葉に基づき、「私は神によって信じています！」と告白して歩むことができる。神はその歩みへと私たちに招いてくださっています。「信仰は望んでいる事がらを保証し、目に見えないものを確信させるものです。」(ヘブル 11:1) この信仰により、目に見えないものを確信することによって、目の前で吹き荒れる嵐を乗り越え、神が計画し、約束したもう最善の祝福に歩むことへ導かれたいと思います。